
私と卓球して(つきあって)下さい！

東雲 春霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と卓球して（つきあって）下さい！

【Nコード】

N7294T

【作者名】

東雲 春霞

【あらすじ】

20xx年。日本で自他共に認める卓球狂の総理大臣、田中慶友がとある法律をうちたてたことから始まる。その法律は卓球告白法（略してタツコク）だった。

少年少女を震え上がらせるこの法律に主人公相葉沙耶は巻き込まれて？

原作とは違う話ですが、出来るだけ読みやすくしたいです。不定期更新です。

1 球目：プロローグ（前書き）

ついつい書きたくなって突如始まりました。

かなり内容はちゃめちゃになるかもですがお付き合い下さい。

1 球目：プロローグ

今日もいつもと変わらない毎日。
周囲の喧騒が煩わしくて鬱陶しくて。
時々それが自分の身にもふりかかってくる。

え？なにが来るのかつて？

タツコクだよ。

卓球告白法略して『タツコク』。

読んで字のごとく告白したい相手に卓球を申し込んでそれに勝てれば見事交渉成立となるけれど、負けちゃったら阻止されちゃうの。
カッブリング

他にもルールはあるけれど、あたしには関係ないだろうから省くね。

タツコクを申し込みたい相手がないからさ。

……正確には大阪にいるよ？

でも、タツコクが法案化する前に彼は大阪へ引っ越してしまっただから。

しかも9年前っていうね（笑）

我ながら一途だなあって思っちゃうけど、向こうはたぶん忘れてるんだろなあ。なにぶん連絡を一度もとってないし、向こうの引

っ越し先すら正確に知らないしね。

彼がそばからいなくなって、

あたしは日々を無味乾燥に過ごしていた。

高校一年、16歳になって9月に入るまでは

。

2球目：久しぶり（前書き）

従来のルールに加えて新しく作ったルールもあります。
タツコクのざつとルール

○タツコク

付き合いたい人に卓球の試合を申し込む。勝ったらカップリング成立、負けたらカップリング不成立。

○略奪タツコク

カップリング成立している相手を好きになったら、そのカップルの同性と好きな人を賭けて勝負することになる。

対象年齢は10歳から18歳まで

大人に適用するタツコク

○プロポーズタツコク（略してプロコク）

結婚したい人に試合を申し込んでカップリング成立した後、カップリング成立中に婚姻届を提出出来れば晴れて結婚が出来る

対象年齢18歳から25歳まで

2 球目：久しぶり

それは9月になってすぐだった。

「えーっと、今日は転校生が来ています。これからこのクラスのメンバーになるので皆さん仲良くして下さいね」

転校生。

ときいてざわめきたたないハズがない。
しかもちよっと美少年なら。

彼は、アッシュブラウンの色をした髪を少しワックスで遊ばせて程よく制服を着崩した感じがまたよかった。
顔もまあまあ、だと思っ。
全体的にちよっと華奢そうに見える。

あたしの観察眼はそう語っていた。
不意に誰かのボソボソ声が聞こえてきた。

「ねえねえ、彼にタッコク申し込む？」

「やだ、美里ったら。彼氏いるくせに」

「だって、あっちの方がカッコいいんだもん」

「確かに！」

アハハハと声を合わせて笑うこの2人にどうしようもないくらい

あたしはイラついてしまった。
……特に何もしないけどさ。

そんなこんなしてるうちに彼の自己紹介が始まった。

「綿貫悠太です。昔東京に住んでたんや…ですけど、転勤でまたこ
っちに戻って来ました」

一礼して言うのとクラスの女子は総勢で黄色い声をあげていた。

「綿貫君！あたしとタツコクして！」

「悠太君！あたしと！」

「彼女はいるのー！？」
などなど。

でもこの時あたしは冷静に状況を観察することが出来なかった。だ
って、9年前に引越してったあの子と同姓同名だったんだから！
思わず驚きで目を見張った。

「ごめん。いっぺんに言われるとわからんわ。タツコクは 受けた
ってもええよ。法律やからな。彼女はいてへんよ。彼女にしたいや
つはおるけどな。で、俺はこの学校で人捜ししてんのや。名前は相
葉。相葉沙耶っていうんやけど知らん？」

クラスの女子全員の視線が一斉にこっちを向いた。

（早く行けよ）とか

（綿貫君とどうい関係なんだよ）とか

うつすら憎悪すら感じた。

(えっ。やっぱり行かなくっちゃダメなの？やっぱり?)
なんとなく命の危険を感じたので、おもむろに席を立った。

「あたしですけど」

そう言った(言わされた)時の彼の顔はじっとあたしの顔を見ていた。

「…沙耶？」

「…なに、ゆーちゃん」

いきなり名前で呼ばれるなんて思ってなかったから柄にもなくすぐドキドキした。いつも周りの女の子を見て思う「ああ、乙女だなんて感覚が今あたしにもあった。

「…やっぱり、さーちゃんだ」

そう言うと彼は嬉しそうに顔を綻ばせた。

「同姓同名の間違いがあっちゃいけないと思ってカマかけたけど、本人で良かったー。」

なんて言い始めたから思わずガクツときた。

「はあ？」

「ちゃんと本人に言いたかったんだよ！俺と、俺とタツコクしてほしいって!!--」

「!!!!」

顔を真っ赤にして宣言した彼を見て思わずあたしも笑っていた。

「ゆるいんだ」

3 球目：本気をだして（前書き）

○タツコクにおいてのペナルティ

タツコクしてカップリング成立になってないのに好意をもつ相手に触ると政府の犬（通称：ジャツジマン）からお仕置きをくらう。

新たに追加したタツコクルール

○バイバイタツコク

カップリング成立したカップルや、離婚したい夫婦の間で別れたい人は相手に申し込む。勝ったらバイバイ成立、負けたらバイバイ不成立。

3球目：本気をだして

驚きと戸惑い、それらを上回る幸福感と高陽感で満ちた放課後が始まった。

場所は教室

卓球台を出したり、審判をする刈谷さんと呼んで、準備は整った。タツコクは卓球がもただから一試合11点マッチでジューズも適用される。

あたしと反対側にはゆーちゃんがいる。

あたしもゆーちゃんとたぶん同様に顔はほんのりと赤かったと思う。周りは普段から目立たない生徒に転校してきたカツコいい生徒がタツコクを申し込んだということとにかく沢山の人だからができていた。

「あの転校生カツコいい！」

「転校生ミスれ！ミスれ！」

「女の方は地味じゃね？」

などなど聞こえてきたけど、色々気にしない。

「それではこれより綿貫悠太と相葉沙耶のタツコクを開始します！」

その言葉をきいてうつむいていた顔をあげるとゆーちゃんが優しく

笑っていた。

「お手柔らかに」

「そつちこそ」

言い終わった瞬間彼からのサーブが始まった。

コンッ

あたしは普通に返した…けど彼はすでにスマッシュを放つ姿勢を構えていた。

「1点目！」

彼が宣言してスマッシュを放った。

普通だったらここで何もしないで11点まで行かせるのだろうけど、あたしは出来なかった。つい、打ってしまった。

パンッ

彼は驚いたようにスマッシュを放ったままの姿勢で呆然としていた。

「0 1! 相葉！」

刈谷さんの鋭い声でゆーちゃんがはつとした。

「……………さーちゃん、俺のこと嫌い？」

「好きだよ。だって、ずっと待ってたんだから。誰にもタッコクで

負けないようにして自分の身を守ってきたんだから。あたしはゆーちゃん以外の人と付き合いたくなんてないんだよ！だからこそ、本気で試合しようよ？」

「カップリング成立してからだっているの…」

「せっかくだから、ね？今のスマッシュ程度じゃあたしを倒せないよ？もっと本気だして、あたしの卓球に染まった9年間に打ち勝つてよ」

「……………いいよ。やってやろうじゃん。カップリング成立したら覚えてるよ」

「変なことしたらバイバイタック（略してバイコク）申し込むからね」

「了解」

またゆーちゃんからのサーブ。今度は結構きわどい角度を突いてきた。

「ただ。あたしにとってはまだ“甘い”球が来たと思えなかった。卓球命で過ごしてたこの9年間はあたしをもっと強くした。あまり知られてないけど、この学校の卓球模擬でも校内1位という成績までいただいたし。」

「だからさ、ゆーちゃん」

ゆーちゃんはあたしが突如話し始めて若干びっくりしてるけどあたしは続けて言った。

「まだ“甘い”よ。あたしを倒すには甘すぎるよ。突然いなくなつて連絡先すらちゃんと教えてくれなかつたんだから、ゆうちゃんには“全力”のあたしを倒す義務があるんだよ。“次”ではもっと」

一旦止めてあたしはスマツシュを放つた。

「強くなつてね」

でもただのスマツシュじゃない。それはあたしのボールを打とうとしたゆうちゃんの前でバウンドした後、一気に下の床に向かって落ちていった。

「0 2！相葉！」

「ゆうちゃん、あたしを倒してみてよ！」

ゆうちゃんはすぐくつらそうな表情をした。

「ごめん。心の中でなら謝れるけど、出てくるのは挑発的で可愛くない言葉ばかり。でも将来的にも互いに強くならなきゃいけないんだよ。もし略奪タツコクをゆうちゃんが申し込まれたら、今のゆうちゃんじゃ勝てないかもしれないんだから。」

「……………じゃ、待っていてくれる？」

「えっ？」

「俺がいつか絶対にさーちゃんよりも強くなつて、全力のさーちゃんを倒す時まで。心は通じ合ってるって思っていてええんやろ？なら、俺はそれを励みに頑張れる」

「ゆーちゃん……」

不意に目頭に熱いものが込み上げてきて、溢れそうと思った瞬間頬を伝った。

「泣くな！今泣きたいのは俺の方なんやから！」

「確かに、そう、だね……」

涙を抑えながら言うとあたしたちは試合を再開した。

「0 1 1！勝者、相葉！よってカップリング不成立！」

周囲からは「やったー」だの「私とタツコクして下さい」だの「悠太くーん」だのと聞こえてきた。これからゆーちゃんは別の人とタツコクを始めるだろう。

「ゆーちゃん」

「ん？」

「あたし以外の子に負けたら絶交ね」

「えええええ！！？」

「いざとなつたらあたしが略奪タツコクを申し込むけどさー、だつてそれじゃなんだもん。ちゃんとゆーちゃんにタツコクを申し込まれて、全力でゆーちゃんに倒してほしいから」

「さーちゃんも負けるなよ。」

「あたしのセリフだし」

「やっと笑った」

「俺は9年前、ひどいことしたって思ってるからちゃんと償うつもりや。さーちゃんに納得してもらえるように」

「期待してる。だからまずは勝っておいで」

「ラジャー！見守つといてえな」

「うん」

そして彼は敵を全部倒すべく戦地へと向かっていった…。

3球目：本気をだして（後書き）

主人公はなぜかチートなみに強い設定になりました。
ゆーちゃんは段々強くなっていく予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7294t/>

私と卓球して(つきあって)下さい！

2011年10月7日10時59分発行